

## 自費研+Vol. 35 中の記事についての公開質問状

自費研代表者殿

公益社団法人 日本美容医療協会 理事長 青木律

突然のお手紙にて失礼いたします。当方は健全な美容医療の普及と促進を目的として設立された美容医療医（美容外科医、美容皮膚科医）からなる団体で、内閣府認定の公益社団法人であります。

過日貴団体から美容医療従事者向けに配布された自費研+Vol.35 内の記事について、日本美容医療協会会員から多くの意見が寄せられたため、ここに当協会会員を代表して貴団体の主張の意図を明確にすべく質問状を送付いたしますので回答願います。

質問は「美容医療に進むために、専門医であることは必須？」という記事に関してです。

1 まず冒頭のリードの部分で「医師採用の際に専門医の資格保持者を優位とするクリニックは全体のわずか2割。」「美容クリニックの中でも専門医の資格を所有している医師は全体の6.6%」との記載があります。また本文中にはこの後もしばしば「専門医」の用語を使用されておられます。

質問1 この専門医とは日本美容外科学会（JSAPS および JSAS）が認定している専門医資格を意味するのか、あるいは基盤学会である日本形成外科学会、日本皮膚科学会、あるいは日本専門医機構が認定する専門医資格をさすのか？

後段において専門医習得のための必要年限が記載されており、その文脈から判断するに本記事における専門医とは形成外科ないし皮膚科専門医を指すものと思われませんが、まず専門医の語の意味するところを明確にされたい。

2 「専門医であることが採用の決め手とならない理由は？」の段落では、「美容医療は自費診療がメインのため、サービス業の一面も持ち合わせています」「強い信頼関係を築くコミュニケーション能力といった人間力は美容クリニックの医師にとって必須と言えます」「常に新しいものを吸収しようとする意欲や向上心を持ち続けられる誠実さも採用の決め手となります」などの記載があります。これらの能力が医師として必須であることは美容医療に限られたことではなく自費診療であるか否かを問いません。臨床医として最低限必要な能力がさも採用の有力な決め手であるかのように主張されておられます。

質問2 本記事は美容医療医にとって医学的知識や経験、技術などは二の次であり採用では重視されないという内容ですが、御誌はなぜ美容医療に医学的知識や経験、技術が必要とされないと主張されるのでしょうか？

3 「資格は武器にはなるがデメリットもある」の段落では専門医資格修得に必要な年数についての記載がありその後「その長い年月が明け、美容クリニックでいざ勤務が始まったとき、初期研修明けの若い医師と同じ土俵で戦うことになる」とあります。形成外科あるいは皮膚科のトレーニングを受けて専門医資格を取得した医師が初期研修明けの若い医師と同じ土俵で戦う、という表現に専門医資格が不要であるという以前に、美容医療においては形成外科や皮膚科の知識・技術が不要であるという趣旨が含まれていると解釈されます。同じ土俵で戦う、という表現はそれらの研修が全く不要であるという意味であると理解されます。これは本段落冒頭での「高い技術力と知識を持っている証である専門医の資格は当然武器です」との記載と矛盾しています。高い技術力と知識を有している専門医であるならば初期研修明けの若い医師と同じ土俵で戦うことはないのではないのでしょうか？

質問3 結局本記事内において資格修得のメリットについての言及はなく「資格は武器ではなくデメリットでしかない」という結論になると理解されます。御誌が資格修得のメリットを一切説明しなかったことについての見解を伺いたい。

4 同段落、「将来的に出産を検討している女性医師の場合、専門医を取得したときは既に30代に入っていることは大きなデメリットです。出産が重なり最初からフルタイムで働けなくなると、美容医療への転科自体が不可能になることも考えておく必要があります。」との記載がありますが、これは看過できない女性差別だと思います。

結論として御誌の意見は美容医療を目指す女性は専門医を取るな、専門医を取った女性美容医療医は出産をあきらめろということです。これは現に多数おられる専門医資格を修得しかつ出産育児を経て立派に美容医療医として活躍している女性医師に対する侮辱であり、また今後美容医療を目指す若い女性医師にそのキャリアデザインに誤った情報を与えるものです。

質問4 御誌の「女性医師にとって専門医資格と出産は両立不可である」という主張は執筆者個人の意見であるのか、本紙発行元である貴団体の公式の見解であるのかを回答願います。またその意見を撤回する意志があるのかをお尋ねします。

5 同段落「美容外科医の初任給の相場は（以下略）」において美容外科医の収入と専攻研修期間中の医師の給与相場の比較をされ「スタートが早ければ早いほど生涯所得が上がることとなります。」と主張しておられます。また後段においては「将来美容の道へ進むなら

早いタイミングがおすすめ！」「いずれ美容の道へ行くならば直接その道へ進むのが近道ということです」と専攻研修をスキップして美容の道へ進むことを推奨しておられます。

御誌の主張の根源は「美容医療と他科の治療は似て非なるもので、一番近いと言われている形成外科ですら、スポーツに例えると違う競技のように別物と言われています」という認識であろうかと思えます。

どのような医療分野であれ研修は必要です。形成外科や皮膚科の研修が美容医療に不要であるという見解に私たちはまったく同意できません。しかしそれ以上に私たちが問題にしたいのは、「初期研修明けの若い医師」が高い給与にひかれて美容クリニックの門を叩き、その結果不適切な医療とそれに見合わない高額な医療費を患者に請求して社会問題になっているということです。そして貴団体のこのような記事がその社会問題に加担しているということです。

美容医療医であってもその前に医師である以上最低限の知識と技術が必要です。専門医は医師としての修行の結果として得られる評価の一つです。それがあることが採用の決め手にならない、むしろデメリットになることがあるという御誌の主張は到底容認できません。

質問5 未習熟の若手医師が高給につられてなんの研修も受けないまま美容医療クリニックの門を叩き、十分な修練を積まないうちからその給与に見合うだけの働きを強要され、結果的に美容医療全体の社会的評価を低下させているという現状については国民生活センターなどの公的機関への相談で明らかになっていますが、美容医療の医師紹介ビジネスに携わっておられる貴団体としてこのような社会的問題点をどう認識しておられますでしょうか？また御誌、貴団体の社会的責任についてどう考えておられるのかをお尋ねします。

以上5点について回答を求めます。

なおこの質問状は当協会の会員には会報で、さらに当協会のHPに公開しております。

回答は2023年4月28日（金）まで、下記住所に書面で送付願います。

公益社団法人日本美容医療協会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 株式会社毎日学術フォーラム内

MAIL : maf-jaam@mynavi.jp

TEL : 03-6267-4550